

編 集 後 記

令和2年は静かな幕明けだった。ニュースで「新型ウイルス」「新型肺炎」の第一報を聞いたときも、ほとんどの国民はその後の猛威など予想もしていなかったにちがいない。例年のない暖冬が過ぎようとしていたときに、クルーズ船の感染者対応のため防護服を身にまとった関係者の映像が連日流れ始めた。以来、トップニュースは感染者数の推移を報じるようになり、11月になった今も収束する気配はない。

「新しい生活様式」という言葉が使われるようになり、私たちは日常のコミュニケーションにも、ひと工夫を迫られることとなった。「ソーシャル・ディスタンス」や「3密」という言葉を目や耳にしない日はなく、いつしか人同士が接近することは“悪”であるかのような雰囲気になった感がある。目に見えないものを相手にして、“正しく怖がる”という難しい（筆者は今もそう思っているが）課題を突き付けられた。

新型コロナウイルスの感染拡大により急遽始まったリモート授業は、教員も学生もほとんどが初めてだった。それでも、短期間での準備や実施に試行錯誤しながら乗り切ってきた経験こそ、今後の授業運営の糧になると確信している。リモート授業が今年度だけで終わる保証がない以上、次年度は今年度以上に質を求めて取り組まねばならない。これまであたり前のように繰り返してきた対面授業との差異をしっかりと見極め、対面授業に全面的に戻ったとしても部分的にリモートのメリットを残し、場合によっては全面的にリモートにスイッチすることも視野に入れる必要がある。

北九州市に「BAGZY」という美容室がある。コロナで客足が遠のき、スタッフも感染の不安を隠せないときに、オーナーの久保氏は、同社の店舗スタッフとその家族を守ると宣言してあらゆる対策を講じた。当時、入手が困難になっていたマスクや消毒液などを全力で集めてスタッフに配り、除菌水の装置などを全店舗に導入し、安心して仕事に打ち込めるよう環境整備を行ったのだ。そして、いろいろな意味で世間からの風当たりが強かった医療関係者には、来店を歓迎する言葉を店頭に掲げ、来店されたときには感謝と激励の気持ちを込めてお土産を渡したそうだ。宅配車両のドライバーにも、配達に訪れた際、同様に感謝の意を表したと言う。（ブロックス主催「未来×幸せ経営フォーラム」より）

まずは我が身を守ることで精一杯というときに、あえて身近な人たちを思いやり、損得抜きにできることを探って実行する大切さを、コロナは知らしめてくれていると感じる。リスクを回避するために、延期や中止を決断することは間違っていないが、知恵を絞り切った上での結論かどうかを常に心に留め置きたいと思う。時計の針を戻すことはできないからだ。そして、心の距離までもお互いに遠ざけてしまわないようにと願いたい。

コロナ禍でご多用な折り、執筆いただいた皆様には心から厚く御礼申し上げます。

令和2年12月 Wataru.Y